

感動通信

National Committee of Dairy Farms for Schools

Vol.73
JANUARY 2024



新たな知識と技術の修得、スキルアップ研修会
日本酪農の未来を見据えた交牧連全国研修会

牛の魅力を伝えることで、
子どもたちの未来を育てる
酪農教育



酪農教育ファーム

感動通信

Vol.73 JANUARY 2024

企画発行・一般社団法人中央酪農会議
酪農教育ファーム推進委員会

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町2-6-1 堀内ビルディング4F
[TEL] 03-6688-9841 [FAX] 03-6681-5295 [URL] <https://www.dairy.co.jp/edf/>

インフォメーション

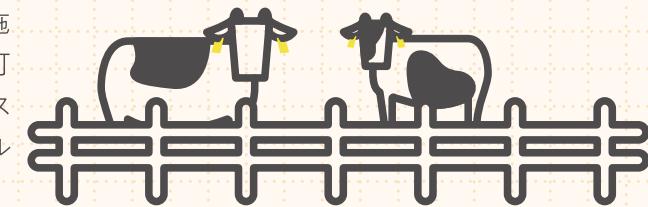
農林水産省がアニマルウェルフェアで新たな指針を策定

農林水産省はこのほど、「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」(令和5年7月26日付畜産局長通知)を策定し、関係者に通知しました。

今号では、指針の概要などを紹介します。

世界の動物衛生の向上を目的とする国際機関・国際獣疫事務局(WOAH。旧略称はOIE)によると、アニマルウェルフェアとは「動物が生きて死ぬ状態に関連した、動物の身体的及び心的状態をいう」と定義されています。アニマルウェルフェアの考え方に対応した飼養管理とは、家畜の飼養者に最新の施設や設備の導入を求めるのではなく、**家畜の健康を保つため、家畜にとっての快適性に配慮した飼養管理を意識、実行することがポイントとなっています。**

これまで、日本国内では民間団体が自主的な指針を作成していましたが、**日本の畜産物の輸出拡大を図るため、国際水準(WOAHコード)に基づいた国の指針を示すことになりました**。国の指針では、各畜種ごとの飼養管理方法などについて、「実施が推奨される事項」「将来的な実施が推奨される事項」を明確にしています。今回の指針を通知した後は、農林水産省が実施状況をモニタリングします。その結果を踏まえ、「実施が推奨される事項」の達成目標年を設定し、可能な項目から補助事業のクロスコンプライアンス(事業の要件化)の対象として、アニマルウェルフェアの普及、推進を図っていきます。



アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針

検索

乳用牛の指針については、**管理方法、栄養、牛舎、牛舎の環境、アニマルウェルフェアの状態確認等、乳用牛のアニマルウェルフェアの測定指標**の6項目となっています。具体的な指針の内容やQ&Aは下記のリンクをご参照ください。

令和5年7月26日付け5畜産第1063号 乳用牛の指針

検索

家畜の飼養管理等に関する技術的な指針に関するQ&A

検索

酪農教育ファーム活動では多くの消費者が牧場を訪れ、乳牛と触れ合います。今後も認証牧場やファシリテーターのみなさんは、普段から乳牛の飼養管理などアニマルウェルフェアに十分配慮し、消費者のみなさんに酪農への理解を深めてもらう活動が求められています。



酪農教育ファーム活動にまつわる
お悩み・質問を大募集!

立場を問わず、

酪農教育ファーム活動を

実践するにあたっての

「お悩み」をお寄せください。

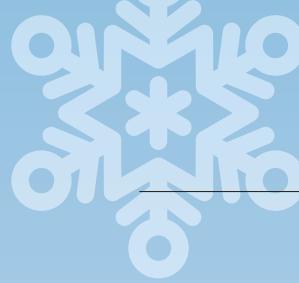
- 酪農教育を学校の授業に取り入れてみたいけれど、どうしたらよいかわからない.....
- 体験に来た子どもから「なぜ牛は白黒なの?」と聞かれて、答えられなかった。みんなならどう答える?

などなど、どんなことでも構いません。お寄せいただいた「お悩み」は、今後、誌面で取り上げていく予定です!



<https://onL.sc/HzfYFfw>
アンケートフォーム内に
記入欄がございます

お悩みは
こちらから!



感動通信
Vol.73 JANUARY 2024

Contents

p. 2

face to face
Vol.73プレゼント企画

COVER STORY

酪農教育ファームスキルアップ研修会を開催

認証更新を目指すファシリテーター22人が東京会場に参加

新たな知識と技術の修得を望んで
充実したスキルアップ研修会

p. 4 - p. 5

p. 6 - p. 7

p. 8 - p. 9

p. 10

p. 11

地域交流牧場全国連絡会が全国研修会開催
東日本大震災から復興を遂げ苦境を乗り越える酪農家たち

全国から集結した酪農家と
日本酪農の未来を見据えて

牛の魅力を伝えることで、子どもたちの未来を育てる酪農教育
やっぱり牛が好き！

牛写真家が実感した酪農教育の意義とは
牛が繋げ、拡げてくれた酪農教育活動の期待と喜び

教育現場にいのちの学びを伝える酪農教育ファーム
令和5年度 酪農教育ファーム実践研究集会

土日ミルクフェス2023in豊洲
牛が都心のショッピングモールにやってきた！

酪農教育ファーム活動とは？

「酪農を通して食やしごと、いのちの学びを支援する」ことを目的に、「認証」を受けた酪農家等が、主に教育現場と連携しながら、牧場や学校等で行う教育活動です。

認証を受けて活動を行う「場(牧場等)」を「酪農教育ファーム認証牧場」、認証を受けて活動を行う「人」を「酪農教育ファームファシリテーター」といいます。2023年3月末現在、全国で248の牧場等と515人のファシリテーターが認証を受けて活動を行っています。

詳しくは酪農教育ファームの
ホームページをご覧下さい。

www.dairy.co.jp/edf/

酪農教育ファーム



face to face
facilitator x cow x education

アンケートに答えてプレゼントをGET

Vol.73 プレゼント企画

J.A全農は、牛乳を50%以上使用した乳飲料「ミルクティー」を2023年11月より販売しています。

やさしい甘さが特長の北海道産のてん菜糖、静岡県産の紅茶葉を使い、
さらに味のアクセントに国産のれん乳を使用することでミルクの割合を増やし甘さひかえめに仕上げました。
容器は、飲み口の広いアルミ缶を採用し、側面には全農酪農部からの願いや想いを、
キャップ部には酪農家が描いたかわいい牛のイラストを掲載しています。

そんな「ミルクティー」の24本セットを、

今号のアンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様にプレゼントいたします。

アンケートへのご回答をお待ちしております！



275g×24本
賞味期限
9か月(常温)

新しくなった「ミルクティー」を飲んで酪農を応援!
牛乳を50%以上使用した
「日本の酪農を応援」シリーズ

今回の感動通信について、
ぜひご意見をお聞かせください。
今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。

※回答時間の目安は2分程度です。
※お預かりしたお客様の個人情報はプレゼントの送付のみに利用致します。

回答はこちらから
アンケートフォーム内に
記入欄がございます
<https://onl.sc/HzfYFfw>



締め切り
2024年
2/15(木)



広い視野と観察力が重要だと気付かされたワークショップ

**教える経験、
引き出される経験で
主体性を持たせる手法とは**

講演後のワークショップは、講師に日本大学生物資源科学部教授の堀北哲也先生を迎えて行われました。テーマは「教えること」と「引き出すこと」で、参加者はワークショップを通じて教えられた経験と引き出される経験をしました。先生はファシリテーション

重要性 画像を使って観察力を確認
広い視野をもつことの

ンの柱である「ノンテント」と「ロセス」という考え方を解説していくきました。これは「ミニユニケーション」の基本ともいえることです。たとえば、ある対話のテーマを「コンテント」とすると、それについての感情の動きが「ロセス」となります。ファシリテーターは酪農教育で人にものを教える立場なので、対話の基礎となる考え方は現場で非常に役立ちます。

画面を使って観察力を確認、を知りました。「一方的に教えるのではなく、問い合わせて一緒に考えていき、ではどうしたらいいのか相手から答えを引き出す方法です。主体性をもたせること、当人を動かすのはこれが最も大事だというのです。ここで先生は自主的に行動することを促すことが、ファシリテーションであると説明しました。

**教える経験、
引き出される経験で
主体性を持たせる手法とは**

講演後のワークショップは、講師に日本大学生物資源科学部教授の堀北哲也先生を迎えて行されました。テーマは「教えること」と「引き出すこと」で、参加者はワークショップを通じて教えられた経験と引き出される経験をしました。先生はファシリテーション

ンの柱である「ノンテント」と「ロセス」という考え方を解説していくきました。これは「ミニユニケーション」の基本ともいえることです。たとえば、ある対話のテーマを「コンテント」とすると、それについての感情の動きが「ロセス」となります。ファシリテーターは酪農教育で人にものを教える立場なので、対話の基礎となる考え方は現場で非常に役立ちます。

画面を使って観察力を確認、を知りました。「一方的に教えるのではなく、問い合わせて一緒に考えていき、ではどうしたらいいのか相手から答えを引き出す方法です。主体性をもたせること、当人を動かすのはこれが最も大事だというのです。ここで先生は自主的に行動することを促すことが、ファシリテーションであると説明しました。



クショップで情報交換をする参加者たち

格農教育ファームスキルアップ研修会を開催

証更新を目指すファシリテーター22人が東京会場に参加

新たな知識と技術の修得を望んで充実したスキルアップ研修会

(一社)中央酪農会議は令和5年9月から11月にかけて、スキルアップ研修会を開催しました。今年度は対面形を4ヵ所(大阪、福岡、札幌、東京)、ウェブ形式を2回開催。このうち、11月9日に開いた東京会場には、認証更を目指すファシリテーター22人が参加し、安全・衛生に関する講演のほか、ファシリテーターのスキルアップに役立つワークショップを受講しました。



比哲也先生と参加者の皆さん

安全・衛生を守るには 病原体の侵入防止と 感染拡大を抑えよう



疾症予防対策について
担当する山村文之介先生

**安全・衛生を守るには
病原体の侵入防止と
感染拡大を抑えよう**

東日本大震災から復興を遂げ苦境を乗り越える酪農家たち

全国から集結した酪農家と日本酪農の未来を見据えて

地域交流牧場全国連絡会(交牧連)の全国研修会が令和5年10月3、4日の2日間、福島県で開催されました。今回は東日本大震災で苦境に陥った福島県酪農の復興状況や、過去のさまざまな難局を乗り切った事例を学んだほか、福島県内の3ヵ所の牧場視察も実施しました。



参加者の皆さん



会場の様子

復興の要は組織力と情報の質
未来を支える柱は人にある！

全国研修会には交牧連会員の酪農家など68人が集まりました。初日の研修会では、福田祐子さん(福島県福田牧場)が司会を務めました。主催者挨拶をした加茂太郎会長は令和4年11月に、東京の豊洲公園で消費者交流イベントを開催し、令和5年11月にはさらに大規模なイベントに交牧連として参加する予定などを紹介しました。(詳細は11ページ参照)



進めるに、その本の編集者の紹介で念願だった牛の写真集を出版できることになり、2009年に初の写真集「うしのひとりごと」を発刊しました。

最初の思い付きからちょうど10年にして夢が叶ったのです。その後は酪農雑誌から連載の依頼を受けるなど、一つずつ丁寧な仕事をこなすうちに縁も拡がっていきました。

日本酪農教育ファーム研究会の定例会スピーチで感慨を覚えた

牛への強い想いだけで努力を重ね、今では誰もが認める我が国唯一の牛写真家で知られるようになつた高田カメラマン。酪農教育ファームについてももちろん知っています。それ以前によく通っていた牧場で子どもをカウボイ体験スクールに入れたところ、大喜びで牛のファンになったことから酪農教育の重要性を実感していたのです。

2022年、日本酪農教育ファーム研究会の横山弘美先生からオンライン定例会でスピーチを依頼され、高校時代に体験した肉牛との別れの話をしたところ、会員の人たちが深く聞き入り、ときには涙してくれたことに感慨を覚えました。「そこでこの方たちと一緒に活動したい、酪農教育のお手伝いがないといつも入会したんですよ」と

牛写真家として母として拡散したい、酪農授業を学校に提案し成功！

研究会では積極的に酪農教育活動に参加したいと思い、機会を窺っていました。実は以前から酪農授業を進めたい一心でPTA副会長を務めていたのですが、コロナ禍で活動できずじまい。息子が5年生のとき、都合でPTAから離れることになつたため辞められました。そこからはどんどん拍子に話が進み、1回目の酪農出前授業が行われたのです。

対象は2年生の児童で2分の1が体育館で酪農家に話を聞く班、残りをさらに2班に分けて、それぞれ搾乳体験と牛の絵を描かせました。「もちろん写真を撮りに行きました。2年生の小さな子供たちが目を輝かせて牛に触り、乳しづりにも夢中になつていてその反応が可愛かったですね」。

児童の中に一人だけ牛に触ろうとせず、鼻をつまんで通りすぎた子がいたのが気になりました。動物が苦手なのかアレルギーがあるのかを考えるためにもっと酪農教育について勉強していきたいと熱っぽく語る高田

さん。その時の体験で保護者の声から酪農授業を実現させられることがわかり、学校への働きかけに希望がもてると言いました。

息子があるとき、将来の夢を酪農家と書いていたのです。それで気がつきました。私たちはせいぜい牛乳を飲んで支えるしかないと思つていましたが、未来を担う子どもたちに食といのちの授業を行なう牛の魅力を伝え、酪農の素晴らしさを感じてもらうこともまた教育のひとつだし、酪農を支えることにつながる気がします」と高田さん。

日本酪農教育ファーム研究会の活動意義は、日本の酪農に新しい可能性を生むことではないか、この活動に力を注ぐことはきっと希望に繋がると信じる、牛に魅せられた一人のカメラマンは、明日もまた牧場の土を踏みに出かけて行

やっぱり牛が好き！牛写真家が実感した酪農教育の意義とは牛が繋げ、拡げてくれた酪農教育活動の期待と喜び

牛に魅せられ、牛と関わりたくてひたすら前に進んでいるうち、いつの間にか牛専門の写真家になっていたという高田千鶴さん。大好きな牛とのふれあいから人と縁が繋がり、絆余曲折の中で絆が生まれて少しづつ夢を叶えてきました。2022年、酪農教育への思いが熟して日本酪農教育ファーム研究会の会員になり、活動の場を拡げるための勉強も進行中。酪農家や教育者が集まった会員の中に、牛写真家という新しい風を吹き込んだ高田さんには大きな期待が寄せられています。



動物と触れ合いたくて選んだ農業高校で牛と出会う

カメラ片手に全国の牧場を精力的に飛び回り、牛の写真を撮り続けている牛写真家の高田千鶴さん。「動物写真家」というより牛写真家と名乗りたい」と、柔らかい笑顔を見せる高田さんは2人の子どもをもつママであります。子どもの頃から動物が好きだったという高田さんは実家の近くにあった大阪府立農芸高等学校に進学し、牛の世話を明け暮れたといいます。

入学後、資源動物科で牛や豚、ヤギ、羊などさまざまな動物の世話を一通り体験したのですが、その中で牛の魅力にハマってしまったんです」と、高田さん。牛の優しい瞳や穏やかな表情、ゆったりと

酪農ヘルパーから写真家の道牛が繋げた縁と絆に感謝

酪農ヘルパーを辞めた後は写真のことをもっと知りたいとカメラ店でアルバイトをします。「このまま牛と離れるのは寂しいなあ」と思っていたとき、友達が牛の写真集があつたらしいのにと

した空気感など全てに心が癒されるのを覚え、それから牛一筋で

した。この時期から牛の写真を撮り始め、趣味のひとつになつていきました。

動物と触れ合いたくて選んだ農業高校で牛と出会う

カメラ片手に全国の牧場を精力的に飛び回り、牛の写真を撮り続けている牛写真家の高田千鶴さん。

「動物写真家」というより牛写真家と名乗りたい」と、柔らかい笑顔を見せる高田さんは2人の子どもをもつママであります。子どもの頃から動物が好きだったという高田さんは実家の近くにあった大阪府立農芸高等学校に進学し、牛の世話を明け暮れたといいます。

入学後も進学より牛と触れ合っていたいと酪農ヘルパーになりました。その後、腰を傷めて退職するまで牛と対話しながら写真を撮り溜めていたそうです。

卒業後も進学より牛と触れ合っていたいと酪農ヘルパーになりました。その後、腰を傷めて退職するまで牛と対話しながら写真を撮り溜めていたそうです。



牛写真家の高田千鶴さん
※掲載の写真は、高田さんの撮影による作品です。

